

「聖玉の王」シリーズ

吟遊詩人の日記1

「旅立ち」「いとこ」「入学」「新生活」

立川 みどり

other-world

旅立ち

ハウカダル共通暦三二一年若葉の月十二日

きょうは、思い切って、親父とおふくろに宣言した。「おれは、家を継いで羊飼いはならない。吟遊詩人になりたい」って。親父はカンカンに怒るし、おふくろは泣くし、たいへんだった。

でも、これは、急に思い立ったわけじゃない。ずっとあこがれてたんだ。親父もおふくろも気づいていたはずだ。だからこそ、妹たちとか近所のチビどもに歌ってやったら、いつも叱られたんだと思う。

くそっ、なんで羊飼いの息子が吟遊詩人になったら悪いんだ。べつに、王様とか騎士とか、不相応なものになりたいってわけじゃない。吟遊詩人は、実力とやる気さえあれば、身分に関係なくなれる職業だ。

家のことだって、ビョルンは兄貴が三人もいるんだから、ディアの婿になって家にきてくれるさ。そのほうが、ビョルンもディアも落ち着くところに落ち着けていいじゃないか。どうして親父もおふくろも、それがわからないんだろう？

ハウカダル共通暦三二一年若葉の月十五日

いきなりビョルンになぐられた。あいつ、何カン違いしてやがるんだか。おれが、やつとディアに家を譲るために、吟遊詩人になるといいだしたと思ってやがったんだ。いくらなんでも、妹の男に跡継ぎを譲るために、生涯の職業を決めたりはしないぜ。いくら幼なじみとはいってもな。

まあ、説明すれば、さすがに納得して、「おまえ、歌が好きだしなあ」などと言ってたが。こんな短絡的な男に妹をまかせてだいじょうぶなのか、ちょっと心配になってきたぞ。

ハウカダル共通暦三二一年花の月一日

領主様のところに春の年貢を届けにいく役を、今年はおれがやることになった。これはチャンスだ。親父とおふくろをどうしても説得できなくて、家出するしかないかと思っていたところだったからな。領主様に何とか頼みこんで、通行証と吟遊詩人になるための許可証を発行してもらおう。

通行証と許可証がなかったら、ちゃんとした勉強もできないし、モグリの吟遊詩人にしかたない。モグリでやっていくのはかなり難しく、危険だってことぐらい、おれだってわかっている。いざとなったら、それもしかたがないかと思っていたが、ちゃんとした正規の吟遊詩人になれるなら、そのほうがいいに決まっている。

ハウカダル共通暦三二一年花の月三日

朝出発して、夕方、領主様の館に着いた。親父のやつ、領主様に手紙を書いてやがった。年貢の一覧表の中に親父の私信が混じってたなんて、全然気づかなかった。くそっ。汚いぜ、親父の

やつ。領主様に、通行証も許可証も出さないように頼むとはな。

でも、領主様は、通行証と許可証を出してくれるとおっしゃった。シグトウーナの音楽学校への推薦状も書いてくれるとおっしゃった。ただし、条件がふたつあるという。

「ひとつは、卒業後にならず吟遊詩人となり、できれば毎年、遠出したときでも三年に一度はここにやってきて、歌を披露すること。都のはなやかさに目がくらんで定住してしまっはいかんぞ」

この条件はもちろんだ。おれがなりたいのは吟遊詩人だ。都の住人になりたいわけじゃない。領主様がこういう条件を出すのも当然だと思う。

でも、もうひとつの条件はよくわからない。

「楽士のラウズが今は外出しているが、夜までには戻ってくる。今夜はこの館に泊めてやるから、あすにでもラウズと話をしなさい。それでも気が変わらなければ、通行証と許可証を発行し、音楽学校への推薦状も書いてやろう」

領主様はそうおっしゃったんだが、どういうことなんだろう？ ラウズ様が、おれの気が変わるよう説得するってことなのかな？

けど、それも変だな。親父はただの羊飼いだ。領主様やラウズ様が、ただの羊飼いの頼みに、そんなに真剣に取り組むなんて。それに、ただの羊飼いの息子のおれを館に泊めてくださるなんて。領主様はもともと気さくでやさしい方だけど、どうしてこんなに親切なんだろう？

ハウカダル共通暦三二一年花の月四日

ラウズ様にお会いした。驚いた。おれに吟遊詩人の伯父がいたなんて。しかも、あの親父が、むかし、吟遊詩人を夢見たこともあったなんて。

「血筋かもしれないな」なんて、ラウズ様はおっしゃるんだ。

なんだか頭が混乱しそうだ。ここに書いて整理してみよう。

親父の兄は、今のおれみたいに、親の反対を押し切って吟遊詩人になったんだそうだ。ラウズ様よりだいぶん年上だけど、いっしょに旅したこともある親友で、歌のうまい吟遊詩人だったが、旅のとちゅうである領主の不興を買って、処刑された。村に墓がないのは、遺体も帰してもらえなかったからだという。

親父は、おふくろと所帯をもちたかったのと、自分の才能にいまひとつ自信がもてなかったのとで、吟遊詩人をめざすのを断念し、祖父の仕事を継いで羊飼いになる道を選んでたんだが、伯父が処刑されてからこっち、歌も吟遊詩人も嫌いになっちゃった。

「仲のいい兄弟だったから、ふいに兄を失った悲しみと衝撃は大きかったのだ。それも自然の死ではなく、処刑などという形だったから。きみが吟遊詩人をめざすことにご両親が猛反対しているのも、その一件が原因だ。ふたりとも、吟遊詩人は危険な仕事だと思っている。そして実際、羊飼いやよりはずっと危険にであいやすい。それでも吟遊詩人になりたいのかい？」

ラウズ様にたずねられて、おれは「はい」と答えた。伯父の話には驚いたし、親父やおふくろが反対する気持ちもわかったけど、おれはやっぱり吟遊詩人になりたい。「一晩ゆっくり考えなさい」と言われたけど、あす、領主様にもういちどお願いしてみるつもりだ。

ハウカダル共通暦三二一年花の月五日

領主様に「決心は変わりません」と言ったら、通行証と許可証を発行してくださった。シグトゥーナの音楽学校への推薦状も発行してくださった。ラウズ様がシグトゥーナに行かれる用事があるので、従者をつとめるなら、旅費も出してくださるという。ありがたい話だからお受けすることにした。

ラウズ様は、出発前に家にいったん戻ってはどうかと勧めてくださったが、それは辞退した。ラウズ様に遠回りさせるなんてとんでもない話だし、親父と会ったら、また大ゲンカになるのは目に見えている。

でも、伯父のことがあったのなら、親父とおふくろが猛反対した気持ちもわからなくはないから、詫びの手紙だけは書いておくことにした。

ハウカダル共通暦三二一年花の月八日

ラウズ様といっしょに旅ができたのは幸運だった。毎晩ラウズ様のすばらしい歌が聴けるし、どこでも歓迎される。ラウズ様の歌も人柄も、みんなに愛されているのがよくわかる。ラウズ様は、いまは領主様のところにずっといて、お抱えの楽士になっているけど、若いころは吟遊詩人だったそうだ。今でも、旅するときには吟遊詩人になるという。おれもラウズ様のような吟遊詩人になりたい。

そのラウズ様がおっしゃった。

「まっすぐシグトゥーナに行かずに寄り道したいのだが、かまわないかね？シグトゥーナに着くのが数日ほど遅れるのはすまないが、どうしても行きたい用事があるし、きみにに会わせたい人もいるんだ」

もちろん、おれは「かまいません」と答えた。シグトゥーナに行くのが数日遅れても、ラウズ様と少しでも長く旅ができるのは勉強になる。

それにしても、おれに会わせたい人ってだれなんだろう？ ラウズ様の知り合いなら、やっぱり、吟遊詩人か、だれかに仕えているお抱えの楽士なのかな？

ハウカダル共通暦三二一年花の月十日

ケルの村まで来た。ちょうど市場が立つ日だ。ラウズ様は、干し肉や穀物など、食料品をずいぶん買いこまれた。まるで、何日も、いや何十日も野宿がつづくような買い物だ。いくら主街道からはずれたって、いちおう街道なら宿屋はあると思ってたんだが、ないんだろうか？ 宿屋がなくても、人家があれば、ラウズ様ほどの吟遊詩人なら、どこでも歓迎されると思うんだが。よっぽどへんぴなところに行くんだろうか？

でも、そんなに長く、宿屋も人家も見つからないようなところを行かなくてはならない村なんてあるんだろうか？ よその国まで行ってしまいそうな回り道に思えるけど。ラウズ様にたずねてみたいけど、回り道をいやがっていると思われたら失礼だしな。

そう思っていたら、考えていたことがラウズ様にわかってしまったようだ。

「たくさん買物をするのをふしぎに思っているだろう？」

返答に詰まったけど、嘘をつきたくはなかったので「はい」と答えたら、ラウズ様は「いまにわかる」とおっしゃった。

「いまにわかる。ここでわたしが説明するより、自分の目で見てわかったほうがいいだろう。きみには自分の目で見てほしい。羊飼いのままでいるなら知らなくてもいいことだが、吟遊詩人になるならよく見てほしい」

そうおっしゃるんだが、どういうことなんだろう？

ハウカダル共通暦三二一年花の月十二日

きょう泊まることにした村は、どうもようすが変だ。主街道から歩いて二日の距離なのに、物

資がひどく不足している。たいていの村では、吟遊詩人がくれば歌を聴きたがるものなのに、この村ではそうじゃない。いや、歌は聴きたがってるんだけど、お金にしろ物にしろ、支払う代価がないんだ。泊めてくれたのは村長の家だけど、村長の家でさえ、おれの家より貧しい感じがする。

ラウズ様は、広場に村人たちを集めて、ただで歌ったうえ、持ってきた食料品の三分の一ほどを分け与えた。ラウズ様には、この村の貧しさがよくわかっていたみたいだ。食料品をたくさん買ったのは、そのためだったんだ。

村長の家で夕食に出してくれたスープの肉は、たぶんラウズ様が分け与えたものだ。子供たちが「肉だ、肉だ」と喜んで、おかみさんに叱られていたからな。ふだんはまともに肉も食べていないんだ。どうしてこの村はこんなに貧しいんだ？

村人たちはずいぶん恐縮していた。そりゃあそうだろうな。ただで歌を聞かせてもらったうえに、食料品をもらったんじゃあな。でも、驚いていないところをみると、ラウズ様はいままで何度もこの村で同じことをしていたみたいだ。

「命日には少し早いのだが、今年は用事ができたもので」

ラウズ様がそう説明しているところをみると、だれかの墓参りでもするのだろうか？

そう思って「だれか亡くなった方がおられるのですか？」とたずねたら、「きみの伯父さん、わたしの親友だ」と言われて驚いた。おれの伯父が亡くなったのは、この少し先の村なのだという。ラウズ様の大盤ぶるまいも、伯父の冥福を祈るためらしい。

「親友を助けることができなかつたから、せめて彼が望むだろうことをしてやりたいのだ」

ラウズ様がそうおっしゃるところをみると、伯父はこのあたりの村の村人たちと親しく、ずいぶん深い思い入れをもっていたんだらう。それにしても、ラウズ様にここまでだいに思われているなんて、伯父はどういう人だったんだらう？

ハウカダル共通暦三二一年花の月十三日

きょう、いここに会った。ラウズ様が会わせたいとおっしゃってたのは、いとこだったんだ。ホープって名前なんだそう。妹のエダにちょっと似ている。

まあ、ずっと知らなかった伯父がいたんだから、今まで知らなかったいここがいたってふしぎじゃないか。でも、彼女の生い立ちには驚いたな。ホープはこの村の領主様の孫娘で、領主様は知らないっていうんだ。

十六年前、伯父がこのあたりにやってきたときも、ここいらの村々は今と同じように貧しく、村人たちは飢えと戦っていた。それで、伯父は、この村にある領主様の館を訪ねて宴席で歌を披露することになったとき、村人たちの困窮を歌って、年貢を軽減するようにと意見したという。

領主様は怒って、伯父を牢に閉じこめた。そんな伯父の歌と伯父自身に、領主様のお姫様が心を動かされた。お姫様は、伯父の歌を聞いて領民の困窮をはじめて知ったみたいだな。それに、伯父を好きになつたらしくて、牢の伯父を助けだして駆け落ちしたというんだ。

「おふたりは、しばらくここに住んでいたんです」

村人たちがそう言って見せてくれたのは、小さなおんぼろの小屋だった。この村の家はみんな

小さくてみすぼらしいんだけど、とりわけ小さな小屋だ。空き家になってたんで、手入れして隠れ住むことにしたらしい。

「でも、わたしが生まれてまもなく、隠れ家は見つかってしまったらしいの」

ホープの話し方は、まるで物語でも語っているみたいだったな。赤ん坊のころのことだから実感がないのかな。それとも彼女のくせなのか？

「父は捕らえられて処刑され、母はわたしをいまの両親にあずけたあとで見つかって、館に連れ戻された。それからまもなく病死したそうよ。ほんとうに病死かどうかはわからないけどね」

彼女の言っている意味がしばらくわからなかった。

「きみのおとうさんのあとを追ったというのか？」

そう聞いたら、ホープは「違う」と言った。

「わたしを残したまま、そんなことはしないと思う。消されたんじゃないかと思うのよ」

ホープはそう言うんだ。でも、領主様からすれば、自分の娘だろ？ いくらなんでも、そんなことをするかなあ。そりゃあ、ホープにしてみれば、父親を殺されたんだから、母親の父をそれぐらい冷酷非情な人間だと思うのも無理ないけどさ。でも、娘の駆け落ち相手と娘本人はまた別だろ？

そう言ったら、ホープは、自分の思いこみじゃないと主張するんだ。

「母がわたしを今の両親に託したのは、領主の手に渡ったら抹殺されるか、よくて政略に利用されると思ったからよ。これは、母がわたしをあずけるときにそう言って頼んだっていうんだから、ほんとうのことよ」

うーん。それなら、つらかったらうな、伯母は。自分の父親をそこまで疑わなくてはならないなんて。でも、自分の領地の村人たちをこんなに苦しめる領主様なら、孫にでもそういうことするかもな。そういう人なら、自分の娘でも殺してしまったりするのかな。

だとすれば、ホープの養父母はたいへんな危険を冒してホープを育ててくれたことになるな。それでかな。この夫婦には娘さんがふたりいるんだけど、妹さんのほうはホープになにか含みがあるみたいだ。ちょっと気になるな。ホープの態度をみていると、仲が悪いというわけでもなさそうだけど。

まあ、うちの妹たちだってときどきケンカをしてるんだから、気にすることもないか。

ハウカダル共通暦三二一年花の月十四日

村の結婚式に出席した。ホープを育ててくれた夫婦の上の娘さん、つまり、ホープにとっては血のつながらない義理の姉にあたる人の結婚式だった。ラウズ様がこの村にやってきた目的のひとつは、彼女の結婚式に出席することだったんだ。

この花嫁は、幼いころ伯父夫婦に命を助けられたらしい。病気になったとき、伯父が持っていた薬のおかげで命拾いして、そのあと、伯母が持っていた装身具を崩して売ったお金で、栄養のあるものを食べられたんだって。ホープの養父母が危険を冒してホープをかくまって育てたのには、そういう事情もあったらしい。それだけでもなかったようだけど。

「ホープはわたしたちの希望なのです」と、おかみさんが言っていた。

「あの方々が出てくるまで、働いて、虐げられて、それから死んでいだけだと思っていま

した。やさしさも希望も知りませんでした。あの方の歌と、わたしたちのために命をかけてくれた行動が、やさしさや希望、それになんと言ったらいいか、……そう、わたしたちに価値があるということを教えてくれたのです。あの方々がいなくなっただけ、ホープがそれをわたしたちに伝えてくれているのです」

おかみさんの説明は、わかったようでよくわからなかったけど、「ホープの歌を聞けばわかります」と言われた。

たしかに、結婚式でホープの歌を聞いて、少しわかったような気がした。ラウズ様の歌もすばらしかったけど、ホープの歌も負けられないくらいすばらしかった。伯父の才能を受け継いでいるんだらうな。おれなんかよりずっと才能があると思う。

彼女の歌は、きれいで、やさしくて、でも悲しい。なんだかとても悲しい。そう言ったら複雑な顔をしていた。悲しく歌ったつもりはないらしい。なのに、歌が悲しいのは、彼女が悲しいんだらうな。この村、悲しみに包まれているような感じが漂っているから。貧しいからだらうな。やっぱり。

結婚式だというのに、料理もひどく粗末だった。ラウズ様があげた食材があったから、なんとかさまになったけど、でなければとても結婚式のごちそうとはいえないだらう。おれたちがふだん食べている食事より粗末な料理しかつくれなかったかもしれない。

そんな貧しい料理でも、村の人たちがせめて結婚式ぐらいはと思って、なんとかやりくりして準備したものんだらうな。

ハウカダル共通暦三二一年花の月十六日

きのう、出立しようとしていたら、この村の領主様から使いがきた。なんだかずいぶん高飛車な使者だった。どうも、「領主付きの楽士をやっているような人間がこの村に来て、領主様にあいさつなしとはけしからん」ということらしい。

そういうもんだったのかな。でも、それがほんとうに決まりなら、ラウズ様は行ってたんじゃないかな。ラウズ様にとったら、ここの領主様に友だちを殺されたわけだから、会いたくはないだらうけど、決まりを破るようなやばいことはしないだらうと思う。なんだか言いがかりをつけられているみたいだ。

ともかく、供の者もいっしょに来いということだったので、おれもいっしょに行った。もちろん、伯父の甥だということは秘密だ。

ここの領主さまは、見かけだけなら、うちの領主様よりちょっときつそうだけのりっぱな騎士に見えた。あの村の惨状を見てなくて、伯父を殺されたって知らずに会っていたら、たぶん、第一印象だけならりっぱな領主さまだと思ったんじゃないかな。

でも、りっぱそうに見えたのは最初だけだった。すぐに、村人を虐げたり、おれの伯父を殺した人なんだと合点がいった。おれが羊飼いの息子だと名乗ったら、ずいぶん見下したような視線を向けてきたもんな。それに、ラウズ様に、なんだかよくわからないいやみのようなことを言っていた。

「そなたの主人は、お抱えの楽士に間諜のまねなどさせて、何をたくらんでいるのかな？ なに

かおもしろいことでも見つかったというなら、ぜひ聞かせてもらいたいものだ」とか、そういうようなことだった。

けさがた、館から帰ってから、ラウズ様に説明してもらってわかった。あの領主様は、ラウズ様が、うちの領主様のさしがねでこの村のことを探りにきたと疑ってたんだ。うちの領主様とこの領主様は、同じ国の騎士で、同じ王様に仕えているのにな。まるで敵どうしみたいだ。領主様どうして、こういうものだったのか。驚いた。

入学

ハウカダル共通暦三二一年花の月二十日

きょう、シグトゥーナに到着した。すごい。大きい。道路が主街道みたいな石畳だし、今まで見たこともない大きな建物がいくつもある。話には聞いていたけど、自分の目で見たのははじめてだ。

ラウズ様が学校に連れていってくださった。どういうコースになるかとか、奨学生になれるかとかは、試験を受けなければわからない。その試験は三日後に受けられることになった。それまで、寮の空き部屋に泊まってもいいということだ。がんばらなくては。奨学生になれないと、とても授業料を払えないからな。

とはいっても、試験までどんな勉強をしていいのかわからない。つけ焼き刃でなんとかなるってものでもなさそうだし、食費とかかかるから、まず仕事を探さなければ。へそくりを持ってきたけど。ラウズ様も、餞別だとおっしゃって、少しお金をくれたけど。

「親友の息子の門出を祝いたいのために、遠慮はしないように。それに、このうちの半分は領主様からだ。領主様は、きみが吟遊詩人となってその使命をはたすことを期待なさっておられるのだから、なおさら遠慮はいらない。当座の生活費の足しにきなさい」

そうおっしゃったので、ありがたくいただくことにした。

ハウカダル共通暦三二一年花の月二十一日

学校に臨時仕事の斡旋所があると聞いて、行ってみたら、まだ生徒じゃないからだめだといわれた。斡旋所は街にもあるけど、当座の生活費があるのなら、試験の勉強をきなさいとも言われた。音楽学校の入学試験って、歌唱力のテストかと思っていたら、それだけじゃないらしい。語学とか、地理とか、歴史とか、音楽史や楽器についての知識とか、いろいろあるらしい。

どうしよう。おれ、語学や地理や歴史なんて、村のオラグじいさんにちょっと教わっただけだぞ。音楽史なんて、ますます知らないし。豎琴を弾くのは得意だけど、おれのよく知らない楽器もいろいろあるらしいし。豎琴が弾けて、歌が歌えればいいと思ってただけだな。

図書館を使えるというので行ってみたけど、むずかしくて頭によく入らない。試験はあさってなのに。羊飼いの息子が吟遊詩人をめざすのって、むりだったんだろうか？

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月一日

よかった～。入学試験に合格した。だけど、一般教養はやっぱ成績が悪くて、子供たちといっしょに勉強しなさいなくてはならない。そっちをちゃんと勉強して試験に合格しないと卒業できないと言われた。必要な一般教養を三年以内に全部合格しないと退学になってしまうとも。それに、学校の必須科目ではないけど、吟遊詩人になるには必要な科目とか、修得しておいたほうがいい科目とかもいろいろあるんだそうだ。

厳しいけど、どっちにしたって、そんなに長くは学校に通ってられない。お金の問題もあるし、十七になってから入学するってのは、かなり遅いスタートなんだから。

さいわい、奨学生試験にも合格した……とっていいのかどうか。学生全部が対象の、優秀な生徒が受けられる奨学生試験はだめだったんだ。合格したのは、卒業後に吟遊詩人になるという条件の試験で、奨学金を受けられる交換条件としていくつかの義務がある。三年に一度は学校に戻ってくるとか、そのとき自分がつくった新しい歌を披露するとか、求められれば王様の前で歌うとか、生徒に教えるとか。義務をはたせば入学金と所定の科目の授業料は免除されるし、それ以外の科目の授業料と寮の費用も卒業後に少しずつ返せばいい。

けれども、吟遊詩人になれなかったり、義務を怠ったりすれば、全部の費用が借金としてのしかかる。

「もしも借金になってしまって、それを返せなければ、債務奴隷にでもなるしか道はなくなる。それでも入学するかね？」

念をおされたので「はい」と答えた。挫折が恐くて後戻りをするのはいやだ。自分を信じてがんばるしかない。

*ちょっと説明。ミウ麦とは、この世界の麦の一種みたいな穀物です。ミウ麦の月はその収穫期ですね。この世界は一ヶ月が二十二日（一年は十六ヶ月と十日）なので、今回は前回の二日後です。

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月二日

授業のスケジュール表をもらってきて、スケジュールを組んだ。学期のはじまりは初雪の月と若葉の月だけど、おおかたの授業はとちゅうからでも受けられる。

一般教養で学ばなきゃいけない科目が多いから、どうしてもそちらが中心になってしまう。とほほ。

一般教養は、音楽学校だけじゃなくて、三つの学校がいっよになっている。音楽学校と、兵士養成学校と、教養だけの学校の三つ。シグトゥーナで平民が入れる学校はこの三つだ。小さな子供たちといっしょらしい。

学校は四歳から入れるんだが、おれが受けなければならぬ科目には、さすがにそこまで小さな子はいない。それでも、いちばん小さな子はまだ七歳とかいってたな。十歳から十二歳ぐらいまでの子が多いらしいしな。なんだか恥ずかしい。全部の科目じゃなくてよかった。

学校でもはじめのほうの段階は、ホルム語の読み書きとかかんたんな計算とかで、それはもうできているから飛ばしてもいいって。で、吟遊詩人になるには、算術なんかはこれでもいいけど、地理と歴史と語学は中レベルまでの知識が必須で、できればもっと上の段階まで勉強したほうがいいんだそうだ。

全部の科目じゃないんだから、がんばってみよう。

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月三日

けさ、希望する授業のプログラム表を提出したら、午後から授業に出てもいいといわれた。きょうの授業は地理と作詞作曲。地理は一般教養の学校にいて、夕方の作詞作曲の授業は音楽学校に移動した。

地理の授業は、予想通り、ほとんど子どもばかりだったが、おれと同じぐらいの年齢のやつもふたりいた。話をしている時間がなくて、どんな人たちかはわからなかったが、ちょっとほっとした。

作詞作曲の授業は、初心者から専門家として通用しそうな者まで、レベルや経験を問わずに出ることができる。上級者だけの授業はこれとまた別にあるらしいが、上級者にはそれとこちらの授業と両方出ている人が多いらしい。それだけ奥が深いということなんだろうな。

寮で同室のウォレスもこの授業に出ていた。彼はかなりの優等生のようなことから、おれたちがいっしょに受ける授業といえば、この作詞作曲ぐらいだろう。

先生がおれのことを吟遊詩人志望の奨学生だと紹介したら、ウォレスはびっくりした顔をしていた。試験でおれが即興でつくった歌を歌うようにいわれ、歌ったら、もっとびっくりした顔をしていた。

おれが歌の題材にしたのはヨハンナばあさんのことだ。何でもいいから、自分の村のことを歌うように言われて、ヨハンナばあさんのことが思い浮かんだんだ。

ヨハンナばあさんは、年をとって足腰が弱くなったし、目も悪くなって、若いころのように畑仕事をするのも、はた織りもできない。でも、おいしいスープをつくるのが得意で、毎日たかさんのスープをつくる。村の者たちは、忙しいときや来客のあったとき、気の向いたときなど、ヨハンナばあさんからスープを買う。だから、ヨハンナばあさんは、身寄りがいなくてひとり暮らしだけど、生活には困っていない。

そういう歌なんだけど、びっくりするような歌かなあ？

ふしぎに思っていたら、あとでウォレスが説明してくれた。

「卒業後に吟遊詩人になるのを条件にした奨学試験ってのは、かなり難しいんだぞ。五人に四人は落ちる。たいがい、即興で歌をつくるところでひっかかるんだ」

そうだったのか、知らなかった。

ウォレスはおれを見直したと言っていた。2日前に同室になったとき、一般教養からやりなおさないといけないと聞いて、内心で少し見下していたらしい。それはおれもちょっと感じていた。優等生を鼻にかけたいやなやつかと、ちょっと思ってたんだ。

でも、ウォレスがおれを低く見ていたのは、たんにおれが一般教養をちゃんとおさめていなかったからだけでもなかったみたいだ。

「羊飼いの息子だとは思わなかった。ホルム語の読み書きができると聞いたからな。羊飼いやら農民やらの子どもは、そういう教養をいっさい身につけていないのがふつうなんだぞ。それに、羊飼いのせがれが急に音楽学校で勉強したいと望んでも、ふつうはかなえられない。だから、てっきり、騎士の息子かなんかのぼんぼんで、とても騎士になれそうもない怠け者の落ちこぼれが、苦しまぎれに音楽への転身をはかったと思ったんだ」

そう言われて、彼のどこか見下したような態度も合点がいった。こんなふうに見られていたのなら無理もないかもな。そういうふうに見られたってことは、おれは、羊飼いの息子としては恵まれているってことなんだろうな。やっぱりうちの村は、このホルム王国のなかでかなり豊かな部類に入るんだ。

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月四日

けさ、洗濯女が注文を取りにきた。うちの村では、洗濯場は村のすぐはずれにあって近かったし、専門の洗濯女なんてなかったから、おふくろが洗濯していたけど、都では洗濯女に頼むのがふつうらしい。おれは節約のために自分で洗濯に行くつもりをしてたんだけど……。

「洗濯場は城門の外で、自分で洗濯しようと思えば、いちいち城門から出て行って、また入らなければならない。けっこうめんどろだぞ。それに、洗濯女は専門職だから、生地を傷めない洗濯のしかたとかがよくわかっている。自分で洗濯するより専門職に頼んだほうが、長い目でみれば得だぞ」

ウォレスがそう主張するので、日を決めて洗濯を頼むことにした。あとでわかったんだが、注文を取りにきたのはウォレスのねえさんだった。ちゃっかりしてるなあ、もう。

とはいえ、洗濯は洗濯女に頼んだほうが合理的というのは、まんざらウソではないらしい。時間的な問題もあるけど、洗濯場はいつも洗濯女たちでいっぱい、いい場所は彼女たちのなわばりみたいになっていて、素人、とくに男が行くと入りこみにくいんだそうだ。で、寮生のなかには、はじめ自分で洗濯しようとしたやつもいたんだが、結局、洗濯女に頼むようになったということだ。

うーん。都の暮らしはやっぱりお金がかかるなあ。寮の食事は、朝食代は寮費に込みだから、卒業してから返せばいいけど、夕食は違うもんな。夕食は寮で食べないやつがたくさんいるから、寮費とは別計算で、毎回お金を払わなくちゃいけないからな。昼食もちゃんと食べたいし。

早く仕事を見つけなくちゃなあ。

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月五日

きょうは午前中に授業があいている時間があったので、学校の仕事斡旋所に仕事を探しにいった。でも、思うようなのはない。

「一般教養をちゃんと習得したあとなら家庭教師の仕事ができるし、音楽の勉強が進んだあとなら、酒場とか金持ちの家の宴席とかで、楽器を弾いたり歌ったりする仕事もできるんだがね。音楽学校に入学したばかりで、しかも一般教養も終わってないんじゃ、皿洗いぐらいしか仕事はないよ」

そう言われてしまった。

皿洗いはひどく給料が安いし、それに、日を決めて長期的に働ける仕事はどれも授業と重なってしまっている。とりあえず、宿屋兼食堂兼酒場で、夕方の授業が終わってからいける三日間だけの仕事があったんで、その仕事を紹介してもらった。

はっきりいって、待遇は悪かった。夕食付きということだったけど、夕食はひどくまずかった。スープとパンというのは寮食堂と同じだが、スープはやたらに薄くて、具は野菜クズと鳥の骨だけだった。聞いたところでは、客に出すスープをとったあとのだしがらに水をたして煮たものらしい。パンも何日か前の売れ残りみたいで、寮食堂のよりずっとまずかった。

使用人でも、上のほうの人はもっとましそうなものを食べていたけど、皿洗い三人の食事は同じ。ひとりはおれと同じ学生だけど、もうひとはここの常雇らしい。ってことは、この人はいつもこういう食事をしているんだよなあ。栄養とかだいじょうぶなのかな？

なんだか、いとこのホープのことを思い出してしまう。彼女の村もひどく貧しかったから、やっぱりこれに近い食事なんだろうな。

報酬は真鍮貨一枚だった。あすの昼食で消えてしまう。時間が短くて、いちおう食事付きなんだから、安くてもまあしかたがないのかもしれないけど。こんな調子でやってたら、お金を使いはたすのは時間の問題だよな。

昼食を安く食べる方法をウォレスに教えてもらってよかった。広場にいけば、平べったいパンに好みの具を巻いたのが買える。細長く切った野菜とかチーズとかハムとか、具がいろいろあって、三種類の具を選んで巻いて真鍮貨一枚。このほかに飲み物を買うお金もいるけど、それでも食堂で食べるより安くすむもんな。きょうの夕食よりずっとおいしくて、たぶん栄養もあると思う。

でも、きょうみたいな仕事をちょこちょこ探してやってるんじゃ、これでもお金が足りなくなってしまうよなあ。食費に洗濯代、それにペンやインクなどの文房具もいるし。うーん、つらいなあ。

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月七日

地理と歴史の授業はけっこうおもしろい。遠くの国のこととか、ずっと昔のできごととかを知るのには、吟遊詩人の歌を聞いているみたいだ。どうして吟遊詩人に地理と歴史が必須なのか、よくわかった。そうだよな。地理も歴史も知らなければ、遠くの国のこととか、昔のこととか、歌えないもんな。

でも、語学は苦手だ。ハウカダル島には、方言みたいなのを別にしても、五つの言語があるからな。そのうち二つはごく限られた地域で使われている言語だから、三つ話せれば、たいていどこでも話は通じるけど。

おれはホルム語しか話せないもんな。ホルム語はいちばん広く使われているし、ホルム語圏外でも、身分の高い人とか商人なんかはたいてい話せるということだけど、村人とか、都市でも貧しい民衆とかはまず話せない。だから、吟遊詩人は三つの言語を話せないとだめなんだ。それに、方言もあるていど覚えないと。でないと、旅できる範囲がかぎられてしまって、仕事にならないからな。

なんだか不便だ。ハウカダル島の人間は、いくつかの民族が何回かに分かれてハウカダル島に移住してきたらしいから、それで言語がいくつもあるんだろうな、きっと。

ハウカダル共通暦三二一年ミウ麦の月九日

定期的にできる仕事が見つかった。羊飼いだ。都にきて、また羊飼いをすることになるとは思わなかった。

それにしても、羊飼いが技能職になるなんて知らなかったな。仕事斡旋所の職員に「なにか特

技はないのか？」と聞かれて、「羊飼いかやっただけではありません」と答えたら、「羊飼いの経験があったのなら、早く言いなさい」と言われた。で、紹介してくれたんだ。

都に羊がいるというのも驚いたけど、村みたいにずっと飼ってるわけではないらしい。都に運ばれてくる肉は、おおかたは塩漬け肉とか干し肉になっているんだけど、身分の高い方々とかお金持ちは新鮮な肉を食べたがることもあって、生きた家畜も運ばれてくる。で、到着してから注文がくるまで、しばらく飼っておくんだそうだ。

でも、都には家畜の世話を慣れた人間はかぎられている。それで、経験者は人手不足がみら
しい。

「とくに朝は人手が足りないらしくてね。寮の門はその時間なら空いているから問題はない。早起きするのが平気なら、行ってみるかね？」

そう言われて、二つ返事で紹介してもらうことにした。羊の世話は嫌いじゃないし、給料がいいんだ。時間はこのあいだの皿洗いと同じで、給料は一日あたり真鍮貨七枚。こちらは食事が付いていないというのを計算に入れても、三倍以上の給料だ。朝の短い時間でいいから、勉強時間もちゃんととれるし、一日に真鍮貨七枚あればなんとかなるだろう。授業が休みの日に仕事が忙しくなりそうだったら、臨時に朝以外の時間も働くことができるみたいだし。少しずつお金を貯めて自分の豎琴を買うのも夢じゃないかもしれない。楽器は学校のものを貸してもらえりけど、できたら自分のを手に入れたいもんな。

で、授業が終わってから面接に行ったら、すぐに採用された。給料は月に二回、十一日と二十二日に精算して払ってくれるんだそうだ。さっそくあすの朝から仕事をするようになった。

寮に帰ってウォレスにその話をしたら、冷やかされた。

「その時間でその給料なら、臨時雇いの仕事としちゃかなりいいぞ。羊飼いをやめて吟遊詩人になるのが惜しくなったんじゃないか？」って。

「おれの兄貴なんか、あちこちの工事現場で働いているんだけど、朝から日が暮れるまで働いて、平均でその倍ていどだ。たいていは昼食付きだけど、昼食たっってひどいもんらしいしな」とも言っていた。

うーん、働く時間が数倍で、給料が二倍しかもらえないのか。工事現場の仕事って、意外に給料が安いんだな。みるからに重労働なのに。

「吟遊詩人でも、稼ぎが悪ければもっと少ないぞ。へたをすれば皿洗いなみの稼ぎだ。だから、おれは吟遊詩人にはならないんだ。できれば王宮に、無理なら貴族か金持ちの家のお抱え楽士になるんだ」

ウォレスはそう力説していた。言葉の端々から推測すると、彼の家は貧しいみたいだから、家族に楽をさせてやりたいんだろうな。

だけど、ほんとに吟遊詩人が皿洗いなみの稼ぎだったら、おれだって困ると思うぞ。なにしろ、奨学金の一部が卒業後に借金として残るんだからな。まあ、でも、そんなことはないと思う。吟遊詩人たちはみんなちゃんと暮らしているんだから。ウォレスが言ったのは最悪の場合だろう。最悪の場合を考えてしりごみしてたんじゃ、なにもできない。まあ、吟遊詩人が所帯をもったりするのはむずかしいと思うけど、それは覚悟しているからかまわない。

吟遊詩人の日記 1

<http://p.booklog.jp/book/101853>

著者 :other-world (立川みどり@アザー・ワールド)

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/other-world/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/101853>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/101853>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ